継続して取り組んでいる連携

連携研究テーマ 「『かかわり合う力』をはぐくむ」

本研究ではぐくみたい「かかわり合う力」

①「もの」や「こと」に対して興味・関心や課題意識をもちながら、物事の本質について追究していこうとする資質や能力（「もの」や「こと」…教材や課題、社会現象や身近な環境など）

②周囲の「ひと」と主体的にかかわり、自ら働き掛けることで健全な人間関係を築いていこうとする資質や能力

平成16年度の大学の法人化に伴い、特色ある附属学校園づくりの一環として、幼稚園・小学校・中学校・養護学校（現：特別支援学校）が校種の枠を越えた教育研究に取り組もうと立ち上げられた。平成27年度までの12年間にわたり、各校園の独自性を生かしながら校種間の接続や指導方法の連続性を模索してきた。その後、平成28年度からもテーマを継続し、連携のさらなる充実を目指してきた。

成果と課題

附属幼稚園

今年度は、各校と複数回にわたり、幼児が日々楽しんでいる遊びを中心に交流を行った。一緒に遊ぶことで普段よりも楽しさが増したり、遊びの説明をすることで、幼児の遊びが深まったりすることにつながった。また、遊びを児童、生徒に体験してもらうことで、幼児の発達や実態を理解することにつながり、互恵性のある交流となった。今後は更に連携を密にし、活動の充実に努めたい。

附属小学校

今年度も各附属校園との交流を通して、子供も教員も自らかかわろうとする主体性を育むことができた。日常の学習活動における子供たち同士の交流に加え、公開研究会に向けての授業づくりや、互いに授業を見合っての意見交換など、教員間の交流も充実できた。今後も附属校園の教員間の連携を緊密にし、教育活動のより一層の充実を図ることで、子供の資質・能力を育んでいきたい。

附属中学校

令和５年度に引き続き、家庭科・英語科・音楽科の交流事業を通して、他校園との交流を図ることができた。また、今年度は他校園の公開研究会に多数の附属中教員が参加し、教員間の交流も図ることができた。四校園の子ども同士・教員同士の交流を通して、教育のつながりを強く意識する契機とすることができた。

附属特別支援学校

各附属校園との交流活動は、ふだんの学習を通して学んだことや取組について発信することで、他者とのかかわりや学びをより豊かにする非常に貴重な学習経験となっている。幼・小・中と様々な形での交流の在り方を模索することで、多様な他者の存在についてより認識を深めたり、共生社会の実現に向けた関係性の在り方について一層検討していきたい。

令和７年度 附属校園公開研究会の御案内

附属校園連携研究テーマ 「『かかわり合う力』をはぐくむ」

令和８年 2月6日㈮ 【特別支援学校】
「知的障害がある児童生徒の「学びのストーリー」を紡ぐカリキュラムの探究」（仮）
（第１年次）

令和７年 10月23日㈭ 【附属幼稚園】
「持続可能な社会の担い手を育む環境とその援助」
～子どもが夢中になって遊ぶ教育課程を目指して～
（第４年次）

令和７年 11月7日㈮ 令和７年 11月28日㈮ 【附属中学校】
「よりよい生き方を探究する生徒の育成」
（第２年次）

令和７年 11月28日㈮ 令和８年 1月30日㈮ 【附属小学校】
「自ら学びを切り拓く」
（第３年次）

※11月28日（金）は、附属小・附属中合同で、文部科学省指定の研究開発（学習の基盤となる資質・能力を育成していく新教科「小学校情報科」の構築）に関わる研究発表会を行う。

宮城教育大学附属学校部連携事業

連携研究テーマ

『かかわり合う力』をはぐくむ

連携実践のまとめ

附属幼稚園
夢中になって遊ぶ

附属小学校
自ら学びを切り拓く

附属中学校
よりよい生き方を探究する

附属特別支援学校
学びの実感と社会とのかかわり

令和６年度の実践

私たちの考える連携研究

1. 子供の発達段階に応じた緩やかな接続を図ることで、各校種間の接続期における子供の負担を減らすこと。
2. 教員同士の情報交換を密にすることで、心の教育や子供の理解の在り方、基礎基本を徹底する学習指導について関連を持たせること。
3. 附属校園内の子供同士の交流活動の場を大切にすることで、健全な人間関係を築くこと。
4. 幼小中と特別支援学校が連携を図ることにより、特別な支援を必要とする子供の実態を把握し、適切な支援の在り方を探っていくこと。

【〔幼〕・〔小〕に関わる取組】

年長５歳児が、１年生と交流会を行った。小学校の休み時間を利用して校庭で一緒に遊んだり、幼稚園に招待して年長児が楽しんでいる遊びを紹介したりした。その後、年長の幼児たちは１年生の児童に小学校に招待してもらい、学校探検を行った。１年生の姿に憧れを抱き、小学校入学への期待感を高めることができた。

【〔幼〕・〔中〕に関わる取組】

令和5年度に引き続き、中学3年生が家庭科の「保育」に関わる学習の一環として附属幼稚園を訪問した。無邪気に遊ぶ幼児の姿に幼少期の自分の姿を重ねながら、遊びを通して保育に対する学びを深める姿が見られた。また、幼児にとっても、保護者や教員とは異なる立場である生徒との関わりを通して、他者との関わり方について学びを深める姿が見られた。

【〔幼〕・〔特〕に関わる取組】

卒園記念品づくりを通して年長5歳児と高等部生徒が交流した。12月は支援学校を訪問した園児に、高等部生徒が木工製品や陶芸製品の作り方を実演したり、SDGsと関連した製品作りについて紹介したりした。2月は高等部生徒が幼稚園を訪問し、卒園記念品を届けるなど、笑顔があふれる交流となった。

【〔小〕・〔特〕に関わる取組】

附属特別支援学校わかば学級と附属小学校３年生が交流を行った。6月にオンラインで交流を開始し、7月と11月に互いに学校を訪問した。7月の附属小学校への訪問では、3年生が計画した玉入れ競争を行った。また、11月の附属特別支援学校への訪問では、一緒に音楽の授業を受けたり、校舎見学をしたりするなど、活動を通して関わり合いを深めることができた。

【〔中〕・〔特〕に関わる取組】

附属中学校３年生と特別支援学校中学部の生徒がオンライン会議システムを用いて交流した。それぞれの学校を紹介した後、中学校の合唱祭での発表時の映像や、中学部の生徒が仙台市音楽祭に参加した際の演奏の映像をお互いに鑑賞し、感想を述べ、交流を行うことができた。

【〔小〕・〔中〕に関わる取組】

英語科で、中学１年生が授業で作成したグリーティングカードを小学６年生に送った。また、中学進学を控えた小学６年生に対して中学１年生が英語を用いた学校紹介を行った。学校紹介は小グループで行い、質疑応答を通して、交流を深めることができた。

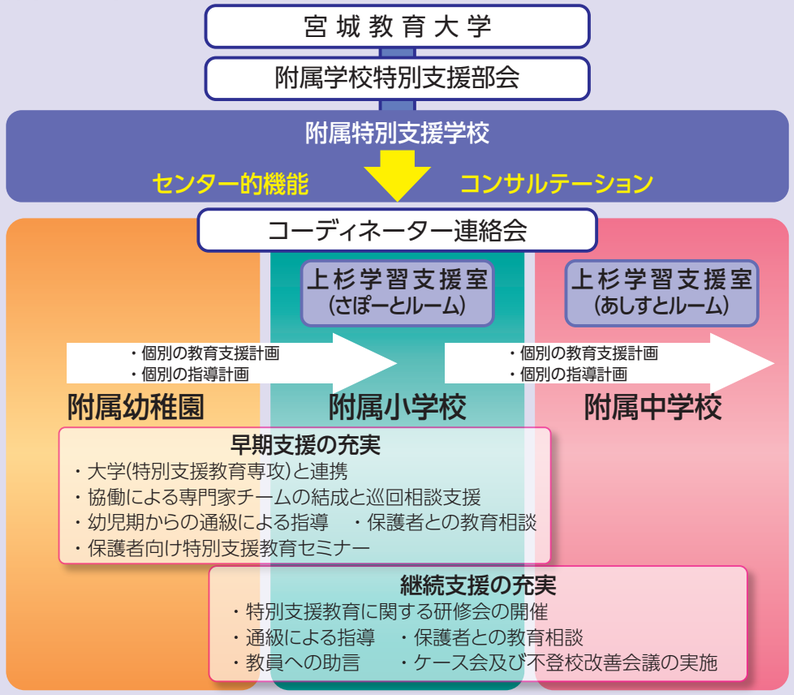
二つの上杉学習支援室を中核に据えた特別支援教育の充実に向けた取組

上杉学習支援室（愛称：さぽーとルーム、あしすとルーム）とは

附属小学校と附属中学校内に設置された通級指導教室です。担当者は、附属特別支援学校の教員でそれぞれ附属小学校と附属中学校を兼務し、日々子供たちの支援にあたっています。特別支援学校のセンター的機能を活用した附属四校園の連携強化によって、附属幼稚園入園から附属小学校を経て、附属中学校卒業まですべての子供たちの特別な教育的ニーズに応えるため「一貫した」「継続した」「長期的支援」を実施する体制を整えています。

上杉学習支援室の取組

①特別な教育的ニーズ（読み書きの苦手さ、対人面やコミュニケーションの苦手さ、不登校、登校しぶり等）のある子供たちへの通級による指導（個別指導）
②実態把握のための個別検査の実施
③保護者との教育相談
④保護者向け特別支援教育セミナーの開催
⑤教員への助言
⑥大学教員（特別支援教育専攻）、作業療法士、言語聴覚士、スクールカウンセラーとの連携と巡回相談の実施
⑦各校園の特別支援教育コーディネーターとの連携
⑧外部機関（医療機関、相談機関等）との連携
⑨特別支援教育に関する研修会の企画・運営
⑩取り組みや研究成果の発信（公開研究会、学会等）



大学との連携・教員の連携

公開研究会や研究授業、研究保育だけでなく、普段の授業や保育において、大学教員という専門的立場から意見をもらい、協力しながら実践研究を進めている。令和２年度以降は、オンラインを積極的に活用し、研究に関わる協議を行ったり、様々な研修会を実施したりするなど、各校園において大学教員から専門的知見を得る機会が増え、教育活動に生かすことにつながっている。

教員同士の連携に関しては、上記に示したような取り組や、公開研究会の実施に当たり、各校園間や各教科部間で協議を行い、教育活動の質的向上に努めている。また、特別支援教育に関しては、年間５回の特別支援コーディネーター連絡会を開催し、各校園の子供たちの情報交換や事例についての検討を行った。本校園において、特に教育的ニーズが大きく、今後の教育界においても重要視される部分での確かな連携を図ることができた。

コロナ禍にオンラインを活用して取り組んできた活動が、対面での活動に戻った形で実施されるようになってきた。しかし、ただ形式的に元通りにするというのではなく、対面、オンライン、そして、オンラインと対面でのハイブリッド型など、方法を柔軟に選択しながら連携を図ってきた。今後も、よりよい連携の在り方を検討していきたい。

その他の連携

教育実習、ICT活用への取組、大学出前講座など、今年度も継続して連携を図りながら、教員と大学が新たな連携の在り方を模索してきました。